

「請益」について

——瑩山禪師の撰述書の位置より——

宮 地 清 彦

一 はじめに

瑩山禪師の『伝光録』の巻頭には、「請益」の語句が見られる。この「請益」について東隆真氏は、『伝光録』提唱の場在家信者が訪れ、その教えによって彼等が救済されたとし、又『伝光録』の内容には在家信者を意識したものがあるとされている。（『伝光録』第二十祖闍夜多尊者の章における「旃陀羅」について参照）そこで、東氏の説と、瑩山禪師が「請益」で語り自らの思想を打ち出した『伝光録』と、叢林の記録である『洞谷記』を中心として、瑩山禪師と在家信者の接点を再考するのが本論の目的である。

二 「身出家」・「心出家」について

東氏は、瑩山禪師の在家者聴聞・奨励の論拠の一つとして、第四祖優婆鞠多尊者章の「心出家」について述べた箇所

を上げている。ここでは「在家」に住んでいたとしても、「涅槃生死」・「菩提煩惱」を分別し執着することの否定が「心出家」である、としている。だが、瑩山禪師は同章に於いて、この「心出家」を否定する姿勢を見せている。

諸佛実これ身出家するにあらず、心出家するにあらず、四大五蘊をもてみるべきにあらず、理性玄妙をもて証すべきにあらず。ゆへに聖凡ともに解脱し、身心おなじく脱落し来る。虚空の内外なきがごとく、海水の表裡なきに似たり。

外面的な「身出家」も、内面的な「心出家」も固定的枠組みにしか過ぎず、瑩山禪師にとつては固定的枠組み設定こそ「脱落」されるべき存在なのである。よつて、瑩山禪師はこの章に於いて、必ずしも在家の立場を奨励しているとは言えない。

三 「叢林」と「在家」について

次に第四十二祖梁山和尚章を検討する。

釈迦牟尼仏もまた五仏の開章に、諸仏世尊、唯以一大事因縁故出現於世。いはゆる仏智見を開示悟入せしむるなり。まさにこの一段の大事因縁をあきらむるを大事とす。徒に仏弟子に似たることをば、よろこばず。もし這箇の事をあきらめずんば、畢竟して在家の俗人となんのこと、なることあらん。(中略) 外に境縁に対するのみにあらず。内に縁慮も忘ずることをあらず。たゞこれかたちの代るのみなり。

仏が自らの智慧を開示して、悟りの境地へ導いた因縁を理解しない者は、在家者と変わらないとし、表面的なものだけ出家者に合わせたに過ぎない、と瑩山禪師は述べているのである。先程の章と同様、在家の立場を奨励しているとは言い難い。更に在家を切り捨て、本当の意味での叢林或いは出家のあり方を提示するに至っている。

もとより人をして在家をはなれ、塵勞をいださしむる心、なにごとにかある。たゞこれ仏智見に達せしめんが為なり。わずらはしく叢林をもふけ、四衆をあつむる、たゞこの事を開明せしめんが為なり。故に僧堂を名けて選仏場といふ。呼長老唱導の師とす。みだりに衆をあつめ、かまびそしくせんとするにあらず。たゞ人をして悉く自己を開明せしめんが為なり故にたとひ出家の形とな

「請益」について(宮地)

りて、なまじゐに叢林にまじわるといふとも、若しこの事をあきらめずんば、徒に勞して功なきのみなり。

「仏智見に達」する事から言えば、「在家」は離れなければならない存在となっている。そして、「仏智見に達」する為の叢林設置を瑩山禪師は説くわけであるから、叢林や請益の場に在家者が訪れ、その教えで救われる可能性は極めて低いと思われる。

では、道元禪師は、教義の面に於いて在家をどのように考えていたのだろうか。晩年の道元禪師が出家至上主義に傾いた理由は、在家者を「宿善」なきものと見なしたからだとする松本史朗氏の説をここでは上げておく(深信因果について―道元の思想に関する私見―参照)。後発の瑩山禪師がその流れを汲んでいたかは定かではないものの、第三祖商那和修尊者章の「昔し、厚植善根、深く般若の良縁をむすぶ。これによりて、大乘の会裡にあつまる」の箇所や、第十四祖龍樹尊者章の「諸人厚植善根なるによりて、正しく如来の正法を聞えたり」の箇所は、瑩山禪師が十二卷本『正法眼蔵』における「宿善」的思想を有していた可能性を窺わせるものがある。これなども東氏の説に対して、やはり疑問の念を向ける要素の一つになるだろう。

「請益」について（宮 地）

四 『洞谷記』に見られる「出家」「在家」について

次に『洞谷記』を検討し、在家者の位置をより具体的に考えてみたい。

『洞谷記』中に瑩山禅師の思想面を考える上で重要な箇所がある。その一つが「能州洞谷山永光寺瑩山和尚語録」中の「学道先須明出家事。出家者非四大五蘊身。非三界受生身」である。ここで語られている「出家」とは、「四大五蘊身」や「三界受生身」を脱し切ったものであり、内外等の思慮分別も存在しない境地と言える。前に上げた『伝光録』の本文と内容がほぼ同一であり、大乘寺々永光寺まで瑩山禅師の思想が一貫していたことがわかる。この「語録」と『伝光録』の内容を合わせて考えれば、瑩山禅師の思い描く仏教世界には在家の存在は稀薄だったと言わざるを得ない。

東氏は前の論文の中で、『洞谷記』を含む種々の永光寺の記録に見られる在家者の名前を上げ、大乘寺の請益で展開された在家救済が、永光寺で一層顕著になったとされている。だが、彼等は所謂「檀那」「檀越」と呼ばれる存在であり、教えによって救済されたというよりは、教団に対する布施によって救われたと見るべきである。彼等が永光寺の経済的基盤の一翼を形成していたのは疑いないが、特に藤原家方は、

正中元年（一三二四）四月八日、永光寺法堂開堂の儀の際に「大檀那」として位置づけられている上に、知事位よりも上座が用意されていたり、個別に礼拝の席まで用意されていたのである。

また、永享四年（一四三二）成立の古写本『洞谷記』にはなく、享保三年（一七一八）成立の流布本に見られる記述ではあるが、「新住持入院」の際の「陞座罷礼賀次資」では、新しい住持に対して、一番最初に「檀那」が祝賀の拝をするようになっており、出家者よりも順序が早いのである。このことは、在家者の役割が経済的援助の面であったことを如実に物語っている。

石井清純氏は、道元禅師が在家者との結縁を叢林の経済的援助面のみで有していたとされている（『永平寺における道元禅の叢林運営の意識について』参照）。確かに清規類には在家者への対応方法も記されているし、『永平寺方丈彩雲記』等にも在家者との接触の例は見られるものの、『洞谷記』の様な具体性には欠ける。逆に瑩山禅師は、道元禅師の幾分曖昧な部分を含む在家者に対する姿勢をより組織化し、経済的援助のみの結縁と限定し、請益も含めた出家者の場所というもの为先ず最優先していたと見るべきではないだろうか。

〈キーワード〉 叢林と出家・在家、伝光録、洞谷記

（曹洞宗宗学研立所所具）